

続文化は、
今に生きる

三〇〇年以上たったのだ。

弟ヤマサチヒコ(山幸彦)と兄ウミサチヒコ(海幸彦)が、『古事記』上巻、『日本書紀』神代下にある。ワタツミの宮は、屋根は鱗をふいたようで、そこには泉があり、ほとりに桂の木があった。

夏は、海。

『古事記』『日本書紀』『風土記』また『万葉集』に、印象的な海の物語がある。

『日本書紀』雄略紀、『丹後国風土記』与謝郡条、『万葉集』巻

この宮で、水をくみにきた女性

伝承考―「貝の道」譚復元の試み

で、不用意に手をのぼして、地元

は含まれて溺れる説話劇が同時

海の風景

深澤芳樹

第九に、浦島伝説がのっている。

漁師は、カツオやタイをおいかけて沖にでた。海で捕らえた五色の亀が実は仙女で、常世の仙都の宮(案内する。地は玉を敷きつめたよう、宮には、門内外に輝く高殿がある。漁師は三年姫と楽しくすくして村に帰ると、すつかりようすがちがう。そこに禁じられていた玉手箱をあけてしまう。するとみるみる髪が白くなる。常世の三年は、現世の

アシカの皮八重、その上に絹八重の敷物と大御馳走でもてなす。それからヤマサチヒコはトヨタマヒメと夫婦になり、三年がすぎた。海神は、釣針を兄ウミサチヒコにかえず際の怖ろしい呪文と仕種をヤマサチヒコに教えて、快速のサメで送り返した。

このサルタヒコの由来を、考古学者木下尚子さんの研究(海人伝承考―「貝の道」譚復元の試み)

には、沖繩諸島北西の具志川島

の歌舞を披露した記事があつて、

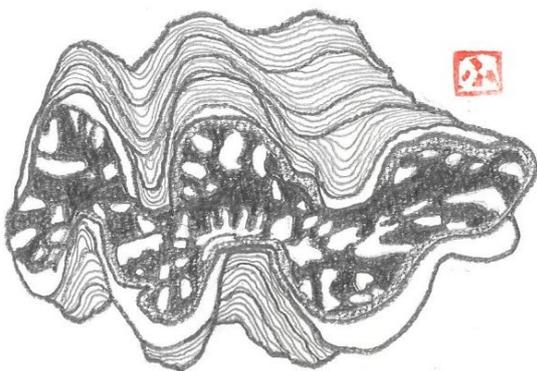
と楽しくすくして村に帰ると、すつかりようすがちがう。そこに禁じられていた玉手箱をあけてしまう。するとみるみる髪が白くなる。常世の三年は、現世の

快速のサメで送り返した。

の仲間に

の隼人が奈良時代に五回、民間

の隼人が奈良時代に五回、民間



口をあけて待つシャコガイ

その殻は貝斧になるほど硬い (深澤芳樹写)

時代にかけて、奄美・沖繩の大型巻貝、ゴホウラやイモガイなどが九州以東に分布する。この海上交易路を、「貝の道」とよぶ。貝交易を担当した海人は、弥生時代前半は西北九州沿岸民だったが、弥生時代後半になると中・南九州沿岸民へとうつりかわった。しかしこの間、黒潮が洗う薩摩半島の人々、薩摩隼人が、

高村光太郎 (日本考古学)

地とする国つ神として登場することしよう。

光り輝く神で、道の衢に天下つて天孫をむかえ、先払いとして

先導する。異形の顔たちで大男

でもあった。彼には、「比良夫貝

(ひらぶがい)に手をはさまれて

沈み溺れるという経歴があつた。

美しいヒメジャコやシラナミが

あつて、潮干狩りができるよう

なサンゴ礁の穴にいる。木下さん

彦の降伏劇と、シャコガイに手を

本大学文学会に教えてもらう

の方にきびしくおこられた経験

がある。

さらに『日本書紀』はサルタヒ

の容姿の異様さをつたえ、とく

にその眼について、「眼如八咫鏡

而絶然似赤酸醬也」と、丸い目が

赤いさまは赤酸醬に似るとある。

これは、日頃から強い直射日光

と潮風と海水をあび、眼が充血

した状態だったからではないか。